



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。

「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 密告者

昭和40年5月10日 初版印刷

検印廃止 円 280

著者 高木彬光

東京都渋谷区本町1-8

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎

東京都千代田区神田三崎町2

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。【関川製本】

表紙の模様・意匠登録 116613

© Akimitsu Takagi 1965

長編推理小説

^{みつ}^{こく}^{しや}
密告者

^{たか}^ぎ^{あき}^{みつ}
高木 彬光



カッパ・ノベルス

目次

第一章	月給五万円……………	5	第十一章	身柄送検……………	161
第二章	苦い思い出……………	16	第十二章	密告者……………	181
第三章	裏切りへの道……………	30	第十三章	告 発……………	200
第四章	再 会……………	38	第十四章	十一の疑問……………	219
第五章	破局への序曲……………	56	第十五章	通夜の客……………	234
第六章	終わりの始まり……………	75	第十六章	真 相……………	246
第七章	検事霧島三郎……………	91			
第八章	最も利益を受けるもの…	111	あとがき……………		256
第九章	疑惑の始まり……………	125			
第十章	破滅への転落……………	138			

本文のイラスト

永田^{ながた}

力^{りき}

第一章 月給五万円

殺人的な夕方のラッシュ・アワーも、どうやらピークは越えていたようだ。とにかく、新聞の立ち読みができるだけの余裕があったのだから……

夕刊は、二日後にせまった公労協の三九・四・一七ストに関するニュースでうずまっていた。瀬川繁夫はうんざりした気持ちで、そこをひろい読みすると、次には株式欄をひろげて、熱心に目を通しはじめた。それは、彼が兜町かぶとちょうから去ったいまでも、残渣ざんさのように、身にこびりついている第二の習性といったぐいの習慣だった。

全般小じっかり、第二部閑散商状——そんな見出しが代表するように、あんまり変わりばえのしない市況だった。このところ、ダウ平均は千二百十円台をうろうろしつつづけている。下がりをはじめると、共同証券の買い支えがはいって、どうにか千二百円の大台を保っているが、どの銘柄にも、動きらしい動きは感じられない。

一月下旬に千三百円台を回復したダウ平均も、それから後はじりじりと下げつつけるばかりだった。朝刊にも、東京証券取引所が、三十八年度下期の決算で、十年ぶりの赤字を出したという記事が出ていたが、それも現在の兜町の一つの象徴といえるかもしれない……

結局、一昨年の夏に、自分が株屋に見切りをつけたのも誤りではなかった——と瀬川繁夫は思った。いままではみついていたら、もっとひどい目にあったかもしれない。手張りの損も、ずっとかさんで、後ろに手がまわり、暗いところにたたきこまれたかもしれない……

そう思ったとたんに、無性に腹が立ってきて、彼は夕刊を電車の網棚の上にたたきつけた。いまだに、株式市況欄を精読している自分が、みじめな滑稽な存在に思われてきたのだった。

いまでは、彼は一枚の株券も持つてはいない。証券会社の社員でもない。いつの日にか——という夢は捨てきれないが、いまのところは自分一人が食って行くのがやっとなで、自分で株を売り買いすることなどは思いもよらない。ダウがいくらになろうと、どの株が上がろうと下がろうと、彼には何の関係もないことなのだ……

瀬川繁夫は目をとじて、自分がばりばりの証券マンだったところのある記憶をたどりだした。

毎日、夕方になるときまって店に姿をあらわし、大黒板の数字に熱心に目を走らせ、株式新聞をもらって帰って行くが、ただの一度も、買い注文も売り注文も出したことのない男——用もないのに、尾羽打ちからした格好で兜町をうろつきまわり、時代おくれの野線学と新東時代に大あてにあてまくったという思い出ばかりならべつづけている『退役將軍』——そういう連中を、彼は軽蔑に近い冷たい目で見つめていたものだった。しかし、いまになって、瀬川繁夫は、彼らの気持ちも、いくらか理解できてきたように思った。

とにかく、角井証券をやめたのは正しかった——と彼はもう一度考えなおした。ただその後がまずかったのだ……二度目の失敗、その後はもう悪くなる一方だった。

中央線の快速電車は、音もなく、新宿駅のホームへすべりこんだ。ほかの乗客といっしょに吐き出された彼は、重い足をひきずるようにして階段をおりたが、また激しいあせりに似た感情が、一步ごとに心を絞めつけてきた。自分一人が、この群衆のなかの落後者ではないか

という妄想さえ胸に浮かんだ。

「瀬川さん……瀬川さんじゃなくて？」

後ろから声をかけられて、彼は駅の地下道の真ん中で立ちどまった。

山口和美——しゃれたベージュのスーツに身をつつみ、銀細工に真珠をはめこんだブローチですっきり襟もとをまとめている。それほど美人とはいえないが、明かるく活発な性格は、よく発達した体の均整とともに、なかなかの魅力を生み出していた。

「やあ……しばらくだったね」

彼の胸には、一度にさまざまな感情が入りまじって噴きあげてきた。ある種のなつかしさ、苦い追憶、そして自分の現在に対するみじめな劣等感——そういうものがいっしょになって、彼の心をかき乱した。

「どうしていらっしゃるかと思っていたわ。一時、おくにへ帰っていらしたって聞いてたけれど……」

「まあね……」

「とにかく、お会いできてよかったわ。あなたにお話ししたいことがあって……前の下宿へでも連絡しようかと思っていたところだったのよ」

「僕に話があるって？」

それも何となくふしぎな気がした。いまの自分に、この女がどんな用があるというのだろうか？ 山口和美——という名前も、彼の心の中では、過去完了になりかけていたのに。

「立ち話ではしかたがないわ。どこかでコーヒーでも飲みましょうよ」

二つ年下なのに、和美は自分がリードするような態度をとって、一足先に歩きはじめた。彼も苦笑いしながら後にしたがった。

いまさら『過去』とは対面したくもなかった。学校時代の友人、証券会社時代の同僚や知人、むかしの女たち、そういう相手は、のこらず避けて通りたかった。

ただ、この女だけはべつだった。一步おくれて改札口を出ながら、彼はこの女が、自分にとって、何かの運命の使者ではないか——という妄想に似た考えにとりつかれていた。

ある意味で、その直感はずしかった。

しばらく会わなかった者同士の会話は、だいたいきま

りきったようなことから始まるものだが、瀬川繁夫と山口和美の場合も、その例外ではなかった。

「最近はどうなぐあいだい？」

「どんなって……わたしのほうは相変わらずよ」

「やっぱり三栄物産の秘書課に？」

「そう。幸か不幸か、社長の信頼も厚くなってなかなかやめられそうもないわ」

「結婚のほうは？」

「まだなの。どうもオールド・ミスになってしまいそうなの。困ったわ……」

口ではそう言っているが、あんまり困ってはいそうには見えない。彼は和美の言葉の調子に、一種の優越感のようなものを感じたが、それも自分のひがみかな——と心に言いきかせていた。

「まあ、君だったら、たいていの男はばかに見えるだろうしね」

「そんなこともないけれど……わたしは、世間なみの奥さんになって、家庭でおとなしくしているのには不向きな女かもしれないわ。それより、あなたのほうはどうなの？」

「それはあんまり話したくないね」

彼は苦笑いしてつぶやいた。和美はじっと目を見はつて、彼の目を見つめ、やがて、

「だいぶご苦労なさったようね……」

と、つぶやくように言った。

「君も、僕が証券会社をやめたことは知っていたね？」

「ええ……株があんなふうではしかたがなかったわね。

わたしも、へそくりをすっかりやられて……こっちは早く見切りをつけたから、まだよかったけれど、株屋さんじゃあ、そうもいかなかったでしょうし……それで、どのくらい穴をあけたの？」

「いやにはつきりしたことを言うな。まあ、それが君らしいところだが……会社には、それほど損害はかけなかった。どうやら、円満退社の線には持ちこんだよ」

証券会社で事故をおこした社員のたどる道は、大きく言って三つある。

こういう事故はだいたい「手張り」と言って、架空のお客の口座を作り、自分がその注文を受けて来たように見せかけて、株を売買し、利益を自分のものにしようとするのが多いのだが、損をすれば収拾ができなくなる。

最悪の場合には赤字を埋めようとして、横領 どのコー スへ転落していくこともないではない。

悪質なのは、もちろんクビになり、回状によって、どの証券会社にも二度と就職できなくなり、場合によっては刑事問題になることもある。

それより程度の軽い場合は、逆に会社にしばらくつけられ、月給からいくらかでも差引きという処分を受けることが多い。これは実に不愉快な状況だし、出世の見こみもほとんどないから、たいていの者はやめたいと思うのだが、会社は辞表を受理してくれない。月給からの天引きなどはたかの知れたもので、一生働いても、穴埋めができるかどうかはわからない。だが、会社の真意は、温情主義の名分の下に、事故社員をこきつかい、労働力でいくらかでも損を埋めさせることにあるのだ。だから、第三のケース、円満退社にもちこめるのは、いちばんましな組だともいえるわけだった。

「そうだったの……それから、ご自分で商売をはじめたとか聞いていたけれど……」

「うん、そのときはまだ、若干の資金を調達することもできたし、仲間もいたから、思いきって独立したんだ。

僕が大將格でね……」

「そっちもうまくいかなかったの？」

「半年ほどがんばって見たが、さんざんな失敗だった。

負けいくさの定石どおり、大將の僕がいちばんひどい目にあつた。後にのこつたのは借金ばかり、おまけに過勞で、体までこわしてしまつたよ……まあ、こんな話はどうよしにして、君の話というのを聞きたいな」

「ちよつと待って……あなたもそんなお話をなさるのはおいやでしようけれども、もう少しおうかがいしておきたいの」

山口和美には何かの考えがあるらしかった。

「体をこわして……それで、郷里のほうへ帰っていらしたのね？」

「うん……しかし、親父もいい顔はしてくれない。もともと、親父は僕が株屋になることにも、独立して商売を始めることにも反対だつたんだからね。もつと堅気の仕事をやれ、さもなければもう後は知らないぞ——ということになって、結局、知合いの紹介で、オンボロ会社のしがないうサラリーマンになり下がつた。さしせまつた借金はいちおう親父に埋めてもらつたが、後の資金がゼロ

では、月給二万五千円でも、ありがたく頂戴するしか手がないさ」

「そんな……」

和美はちよつと目をおとしてだまつたが、一瞬後には顔をあげ、口もとに謎のような微笑を浮かべて、

「それじゃあ、月給五万プラス・アルファ——という仕事なら、思いきつてやってみる気はおあり？」

「五万プラス・アルファ？」

瀬川繁夫は思わずぐくりと唾をのみこんだ。いまの収入の二倍なのだ……彼は兜町時代に、自分が手張りで、一時五百万以上の金を握つたことがあつたのも、この瞬間にはすっかり忘れてしまつていた。

「むこうの条件は、以前証券会社で、営業なり外交なりを担当していて、相当の成績をあげた人物——ということなの」

和美は静かな声で続けた。

「それに、年は三十歳までということなの。もちろん、採用するかしないかは、社長が面接してきめるというんだけれども、その話を聞いたとき、わたしはすぐ、あなたのことを思い出したのよ。びつたりじゃなかつて？」

「そりゃまあ、自慢じゃないが、僕は店でもかなりの成績は上げていたがね……ただ、もと証券会社の社員という条件はどういう意味なんだろう？ その会社は、商品相場か何かの店なのかな？」

「そうじゃないらしいわ。わたしのほうもまた聞きだから、くわしいことはわからないけれども、新和商會——という小さな商事会社、ふつうの商売らしいのよ。要するに、セールの腕のある人という意味じゃないのかしら？」

「それじゃあ、うまくやれば月平均五万以上の収入になるという話じゃないのかな。固定給はごくわずかで、あとは歩合という……そんな話ならよくあるがね」

「その点は、わたしもはつきりたしかめたわ。固定給五万という線は間違いないのよ」

「信じられんな。そんなに高い固定給なんて……よほどきびしいノルマでもあるのか、一定の成績を上げるまでは無給だとかいった、妙な条件がついているんじゃないかね」

「そんなこともないらしいのよ」

「それがほんとうだとすれば、すごい好条件だが……」

瀬川繁夫も首をひねった。たしかに、証券会社の不況で、最近ほかの職場へ転進して行った人間はかなり多い。しかし、彼ぐらいのキャリアでは、せいぜい月給三万というのが通り相場だった。五万となると、大企業でも勤続十年前後、係長から課長クラスの月給に相当してくる。どう考えても、話は少しうますぎるように思われた。

「しかし君は、その話を、いったいどんな筋から聞きこんだんだ？」

「大串昭三さんよ。あの人は、仕事の関係でときどきうちの会社に来るんだけど、三日ほど前に、わたしをつかまえてこの話をしてくれたの。あなたなら、この条件にはうってつけだと思うけれども、いまだこにいるか知らないか——と聞いたのよ。理屈の筋は通っているでしょう？」

「なるほど、大串がそんなことを言っていたのかね」

瀬川繁夫はひとりごとのようにつぶやいた。大串昭三は大学当時、比較的親しくしていた仲間のひとりだった。卒業後は三栄コンツェルンの一つに属する神栄造機という会社につとめたのだった。

「しかし、それももう手おくれかもしれないな。大串君がその話を聞いたのは、その何日前かもしれないし……もと証券会社の営業マンで、僕ぐらいの年配の人間なら、いくらでもある。そこにそれだけの好条件を持ち出されたら、たいてい飛びつくだろうからな」

「でも、大串さんに会ってみるだけ会ってみたら……むこうからそう言ってくれたんだし、もし、まだ誰も適任者がなくって、あなたの話がまとまったら……」

なぜか、和美の肩先はちよつとふるえた。いっそうしんみりした調子になって、

「実はわたしも、この話をあなたにすすめたものかどうか、ちよつと迷っていたのよ。五万円というのは、たしかにあなたが言うように世間の標準からかけはなれていゐるわ。だから少しインチキくさいんじゃないか——とも思つたの。でも、失礼かもしれないけれど、いまのあなたには、これ以上なくするものもないでしょう。とにかく、いちおう当たってみるだけでも——と思つたのよ」

「ありがたい。ほんとうに月五万くれるのなら、犯罪行為でもないかぎり、たいていのことはがまんしてやりとげるよ」

それは彼の偽らない本音だった……

翌日の夕方、瀬川繁夫は西銀座のビヤホールで、山口和美と大串昭三に会った。

大串昭三も、学生時代の大半は、なりふりにもかまわない、どこかぼさとした感じの男だったが、いま会ってみると、服装もばりつとしてゐるし、いかにもやり手らしい感じに一変してゐた。瀬川繁夫は、やはり、ある種のコンプレックスを感じないではおられなかった。

友人の近況などについて、ひととおり雑談がすむと、大串昭三はすぐ話の核心にはいった。

「この話を聞いたとき、僕はすぐ君のことを思い出して、山口さんにも話をしたんだが、ただ正直なところ、僕はこの件をあまり積極的にすすめる気にはなれないんだ。名前を言つても、誰も知らないような会社だし、その会社が五万円も破格のサラリーをはずむということにも多少の疑問があるしね……」

「しかし、いまさら僕がまともな大会社へはいれるとは思われないし、たとえはいれても、出世の見こみもうすいからな。少しぐらいあやしげな会社でも、入社してか

ら、思う存分、腕がふるえるところのほうがいいと思うんだ」

そのことは、昨夜、瀬川繁夫が十分に考えたあげくの結論だった。どうせ、二度も大きなつまずきをおかしている身だし、それが三度になったところで、たいして変わりはない。どうせ、人生は七転び八起きなのだ……

「なるほど、たしかにそういう考え方もあるね……この話を持ちこんで来たのは、酒井幹雄さかい みさおという男なんだ。僕もひょんなことから知り合っただけで、それほど親しいわけではないんだが……大学時代の友人に、こういう人はいないだろうか——という話があつてね、将来、自分の片腕になってくれるような、たしか人間がほしいと言うんだ」

「その酒井という人は、どんな男だね？」

「年配も、われわれとあまり変わらない。せいぜい三つ四つ上というところかな。その点にも、僕はいくらか不安を感じるんだが」

「ということは、彼がその会社の経営者だというわけだね？」

「そうなんだ……ただ、自分にはかなり有力なバックが

あるというようなことは、ほのめかしていたがねえ……それから彼は、妙に顔の広い男で、たとえば舶来はく来のゴルフ道具だとか、洋酒だとかいったものを、安くどこからか手に入れてくれる……一種のブローカーブローカーみたいなところもあるんだ」

「なるほど……」

駐留軍のほうにでも顔がきくのかな——と瀬川繁夫は思った。ふつうの人間なら、危険を感じそうな話に、彼はかえって甘い汁のにおいをかぎつけた。

すべて、やり方一つでは、ブローカーブローカーはどうまみのある商売はない。プラス・アルファプラス・アルファという言葉も何となく理解できる……こういう直感ちくかんは、利にさとい証券マン時代に、十分につちかわれたものだった。多少までもないところもあるかもしれないが、まともな手段では儲もかる金も知れている……

「それで、ほかに特別な条件はないのかい？」

「英語と、車の運転と、写真ができるほうがいいと言っていたが……」

「車なら、株屋時代に免許をとった。写真のほうも——一眼レフの程度なら、前にあつかったことがある」

「そんならあとは、酒井幹雄の氣にいかどうかという問題が残っているだけだね。会社といつても、個人企業みたいなものだから、彼としても、パートナーは慎重に選びたいらしいのだ」

「それはあたりまえだろうね」

瀬川繁夫の腹は完全にきまった。酒井幹雄という男は、年はわかくても、たいへんなやり手なのだろう。そういう男と組んで仕事をするのは、不安はあつてもやりがいのあることにちがいないと、彼はひとりできめこんでいた。もともと、彼は手張りをやつたり、独立してみたりで、山師根性は人一倍旺盛おごせだったのである……

それに何といつても、五万円の月給は、たいへんな魅力だった。いまの二万五千円程度のサラリーも、べらぼうに安いとはいえないかもしれないが、厚生設備のととのった大会社、中堅どころのサラリーとは、実質的にたいへんな開きがある。相場が白熱していたころは、毎月二十万も使っていた瀬川繁夫にとっては、骨身にこたえるような安月給だった……

大串昭三は、ジョッキの残りを一気にのみほして、
「きょう僕は酒井にいちおう電話をかけてみた。まだき

まっていけないという話で、君のことを話したら、ぜひ会つてみたいと言つていたよ。明日にでも、事務所のほうへ来てほしいということだった。行つてみるかい？」
「うん、もちろんだ」

大串昭三は名刺を二枚出して、一枚にかんたんな紹介の文句を、もう一枚の裏には、新和商会の住所、電話番号、略図などを書きこんでくれた。

「どうもいろいろありがとう」

「なにもあらたまつてお礼を言われることはないよ。ただ、話がうまくいったら、山口さんと二人でおごつてもらおうかな。何しろ、僕なんかよりも、はるかに高給とりになるわけだし……それじゃあ、僕はこれで失敬するよ。いまからおつきあいで、一席かこむことになつていくんだ」

大串昭三は、麻雀マージャンのパイをならべる手つきをして見せて、

「そういえば、むかしの仲間とも、久しくお手あわせの機会がなかったな……どうだ、今度荻野おぎのの家へでもおしかけて行つて、一勝負やろうじゃないか」

と何気ない調子で言つた。

大串昭三に、何の悪意もなかったことはわかってゐる。しかし、この言葉は瀬川繁夫の胸をするどくえぐった。

荻野省一——これは彼の、ふれられたくない過去の中でも、もっともふれられたくない人の名前だった……

大串昭三が帰ってから、瀬川繁夫と山口和美は、もう一杯ずつジョッキをあけた。和美の顔は、ほんのり桜色にそまりはじめた。

「瀬川さん、散歩しない？ わたし、少し酔ったわ……」

「うん、どこへ行こうか？」

「月なみだけれども、日比谷公園がいいわね。ここからも近いし……」

ピヤホールを出て、二人は公園のほうへ向かった。四月にしてはかなりむし暑い晩だった。アベックだらけの夜の公園には、何となくむせかえるような空気が流れていた。

二人は無言で歩きつづけた。瀬川繁夫は、かすかな体臭のまじった香水の匂いを、いつになく新鮮なもののように感じていた。和美のほうは、彼からは目をそらし、

さまざまに変化する大噴水を見ながら歩きつづけていた。彼は和美と初めて肌をふれあった日のことを思い浮かべた。それは二重の意味で、忘れられない記憶だった……

その日は、荻野省一と室崎栄子との結婚式の当日だった。彼も和美も友人代表として出席した。覚悟はきめていたものの、祝辞をのべるのは、やはり辛いことだった。新婚旅行に出かける二人を東京駅まで送ったあと、彼は心の中にどうしようもないほどの大きな空洞があることを意識しないではおられなかった。

彼は和美を飲みにさそった。そのころはまだ景気がよく、懐ぐあいを気にしないで、いくらでも飲めたのだった。

和美はまるで子供のように、いろいろな色のカクテルを注文した。赤いブラッディ・マリー、黄色いサイドカー、緑色のミントフラッペ、淡紫色のブルー・ムーン、真珠色のギムレット……いま、ここで見る日比谷の大噴水は、そうしたカクテルの色を、彼の心の中にはっきりと思いおこさせた。

——あなたは寂しいんでしょう？

あの時、酔っぱらった和美は、彼の肩に頭をよせて、ささやいてきたものだった。

——そうでないと言ったら、嘘になるな。

——わかるわ。その気持ち……

——わかる？ まさか、君は荻野と……

——好きかどうかはべつとして、結婚の相手としては申し分ない人ね。

——おやおや、われわれは似た者同士か。

そのとき、和美の瞳がきらりと光ったことを、繁夫はいまでもよくおぼえている。

——ねえ、瀬川さん、うさばらしに、二人の先を越さないこと？

——どういう意味だ？

——わかつていないじゃない。もちろん、わたしは気まぐれよ。ただの気まぐれだから、決して、あとまであなたをしばりつけようとは思わないわ……べつに、やけをおこしたわけじゃないのよ……あなたと同じように、わたしも今夜は少し寂しいの……

実におかしな成行きだった。和美がどうしてそんな気持ちになったのか、彼にはわけがわからなかった。ほん

とうに、和美が荻野省一に気があったかどうか——少なくともそれまで、彼はそういう気配さえ感じたことはなかったのだ……

噴水の色はまた赤から緑にかわった。瀬川繁夫の回想も、その動きにさそわれたように一転してさらに過去へとさかのぼった。

栄子のほの白い顔が瞬に浮かび上がった。そういえば、栄子とのデートには、よくここを利用したものだった。最初の接吻をかわしたのは、二人ともまだ学生ころで、どちらも臆病だった。ふるえながら唇をあわせたので、歯がカチカチ鳴ったものだった……

「瀬川さん」

突然、和美に声をかけられて、彼ははっとわれに帰った。

「何を考えていらっしゃるの？」

「いや、べつに……」

「誰か、ほかの女のひとのこと？」

それが、鋭い女の直感というものだろうか？ 彼は何となくたじろいだ。

「繁夫さん……」